

(神社本庁ページより抜粋)

鳥居について

私たちが神社にお参りをするとき、まず鳥居を目にします。

鳥居は神社を表示し、また神社の神聖さを象徴する建造物と言えます。

地図などに神社を表示する際も、鳥居のマークを用います。

鳥居は神社の内と外を分ける境に立てられ、鳥居のうちは神様がお鎮まりになる御神域として尊ばれます。

また、特定の神殿(本殿)を持たずに、山など自然物をご神体、または依代(よりしろ)としてお祀りしている神社の中には、その前に鳥居が立てられ、神様の御存在を現すものとして重視されています。

鳥居の起源については、天照大御神(あまてらすおおみかみ)が天野岩戸にお隠れになった際に、八百万の神々が鶏を鳴かせましたが、このとき鶏が止まった木を鳥居の起源とする説や、外国からの渡來說などがあります。

鳥居は、その材質・構造も多種多様で、それぞれの神社により形態が異なります。

一説には六十数種類の形態があると言われており、代表的な者としては、鳥居上部の横柱が一直線になっている神明(しんめい)鳥居と、この横柱の両端が上向きに反っている明神(みょうじん)鳥居があります。

このほか、形態では明神鳥居の横柱上部に合掌型の破風(はふ)のついた山王(さんのう)鳥居や、また朱塗りの稲荷鳥居など特徴的なものがあります。

起源や形態などさまざまではありますが、鳥居を見ると神聖さを感じるのは、我々日本人の共通した考え方ではないかと思えます。

神社の名称について

「神宮」「神社」の名称は、神社名に付される記号で"社号"と言います。

現在、単に「神宮」と言えば伊勢の神宮を示す正式名称として用いられています。

また「神宮」の社号を付されている神社には、皇祖(こうそ)をお祀りしている霧島神宮や鹿児島神宮、また天皇をお祀りしている平安神宮や明治神宮などがあります。

このほか、石上(いそのかみ)神宮は鹿島神宮・香取神宮など特定の神社に限られています。これに対して「神社」はその略称である「社」とともに、一般の神社に対する社号として

広く用いられております。

また、「宮」や「大社」などの社号もあり、「宮」は天皇や後続をお祀りしている神社や由緒により古くから呼称として用いられている神社に使われます。

「大社」は元々、天孫(てんそん)に国護りをおこない、多大な功績を挙げた大国主命(おおくにぬしのみこと)を祀る出雲大社を示す社号として用いられてきました。

しかし、現在「大社」は、広く崇敬を集める神社でも使われています。

このほか、社号と異なりますが、古くから神様の名前に「大神」や「大明神」、また神仏習合の影響による「権現」といった称号を付して社号に類するものとして一般に用いられ、信仰されている社もあります。

このように神社により社号は異なりますが、それぞれの神社に対する人々の篤い信仰にはいささかの変わりもありません。

参道の狛犬(こまいぬ)などについて

神社にお参りすると参道の両脇に一对で置かれた石製の狛犬を見かけます。

神社境内のことを語るとき、鳥居と並んでまず思い浮かぶほど、狛犬は神社にとって一般的なものとなっております。

普段、私たちは石製のものを多く目にしますが、このほかに、社殿内に置かれる木製や高麗犬の意味で、獅子とともに一对になって置かれているとする説もあり、その起源も名称が示すように渡来の信仰に基づくもので、邪気を祓(はら)う意味があるといわれています。

神社にあるのが一般的ですが、寺院でもまれに置かれることがあり、東大寺南大門のものが石製としては我が国最古のものとされています。

また宮中では几帳(きちょう)の裾に置く重石(おもし)として木製の狛犬を用いてきたようです。

神社によっては狛犬ではなく、狐や牛などの場合もあります。

狐は稲荷神社、牛は天満宮に見られ、ともにお祀りされている神様の神使(しんし・お使い)であるとされています。

狛犬の表情は神社、あるいは地域によって実に多様です。

各地の神社を訪れた際に、いろんな表情をした狛犬を眺めることもお参りをする楽しみの一つになるのではないのでしょうか。

氏神様と崇敬神社の違いについて

全国の神社については、皇祖(こうそ)天照大御神(あまてらすおおみかみ)をお祀りする伊勢の神宮を別格の御存在として、このほかを氏神様と崇敬神社の二つに大きく分けることが出来ます。

氏神神社とは、自らが居住する地域の氏神様をお祀りする神社であり、この神社の鎮座する周辺の一定地域に居住する方を氏子と称します。

元来は、文字通り氏姓を同じくする氏族の間で、自らの祖神(親神)や、氏族に縁の深い神様を氏神と称して祀ったことに由来し、この血縁的集団を氏子と呼んでいました。

現在のような地縁的な関係を指しては、産土神(うぶすながみ)と産子(うぶこ)という呼称がありますが、地縁的な関係についても、次第に氏神・氏子という呼び方が混同して用いられるようになりました。

これに対して、崇敬神社とは、こうした地縁や血縁的な関係以外で、個人の特別な信仰等により崇敬される神社をいい、こうした神社を信仰する方を崇敬者と呼びます。

神社によっては、由緒や地勢的な問題などにより、氏子を持たない場合もあり、このため、こうした神社では神社の維持や教化活動のため、崇敬会といった組織が設けられています。

氏神神社と崇敬神社の違いとは、以上のようなことであり、一人の方が両者に信仰(崇敬)しても差し支えないわけです。

お賽銭について

お賽銭の意味や起源には諸説があります。

現在では神社にお参りすると、お賽銭箱に金銭でお供えしますが、このように金銭を備えることが一般的となったのは、そう古いことではありません。

元々、御神前には海や山の幸が供えられました。

その中でも特に米を白紙で巻いて包み「おひねり」としてお供えしました。

私たちは祖先の時代から豊かな自然に生まれ暮らし、秋になるとお米の稔りに感謝をして刈り入れた米を神様にお供えしました。

こうした信仰に基づき、米を「おひねり」としてお供えするようになったのです。

しかし、貨幣の普及とともに米の代わりに、金銭も供えるようになりました。

そもそも米は、天照大御神がお授けになられた貴重なものとされ、人々はその大御恵(おおめぐみ)を受け、豊かな生活を送ることが出来るように祈ったのです。

現在でも米をお供えする方もいますが、金銭をお供えすることも、この感謝の気持ちに変わりはありません。

お賽銭箱にお金を投げ入れるところをよく見かけますが、お供物を投げてお供えすることは、土地の神様に対するお供えや、祓いの意味があるとも言われています。

しかし、自らの真心の表現としてお供えすることなので、箱に投げ入れる際には丁寧な動作を心掛けたいものです。

玉串の意味について

玉串は神前にお供えするものとして、米・酒・魚・野菜・果物・塩・水等の神饌と同様の意味があると考えられています。

しかし、神饌と異なる点は、玉串拝礼という形で自らの気持ちを込めて供え、お参りをするということです。

勿論、神饌も注意して選び、心を込めてお供えをしますが、玉串は祭典の中で捧げて拝礼することから、特別な意味を有するものであることがわかります。

「神社祭式同行事作法解説(神社本庁編)」では玉串を捧げることを「玉串は神に敬意を表し、且つ神威を受けるために祈念をこめて捧げるものである」と説明されています。

玉串の由来は、神籬(ひもろぎ)とも関連して「古事記」の天の岩戸(あまのいわと)隠れの神話に求められるものといわれています。

すなわち、天照大御神の岩戸隠れの際に、神々が行った祀りでは真榊に玉や鏡などをかけて、天照大御神の出御を仰いだことが記されています。

その語源には幾つかの説があり、本居宣長(もとおりのりなが)は、その名称の由来を神前に手向けるため「手向串(たむけぐし)」とし、供物的な意味を有するものと解しています。

また平田篤胤(ひらたあつたね)は、本体は木竹(串)に玉を着けたものであったために「玉串」と称したと述べています。

このほか、六人部是香(むとべよしか)は真榊が神霊の宿ります料として、「霊串(たまぐし)」の意があるなどとしています。

こうしたことから、玉串は神籬と同様に神霊を迎える依代であり、また玉串を捧げて祈る人の気持ちが込められることにより、祀られる神と祀る人との霊性を合わせる仲立ちとしての役割を果たす供物であるということが出来るのではないのでしょうか。